

MINERVA
西洋史ライブラリー
⑪3

記憶と忘却のドイツ宗教改革

—語りなおす歴史 1517-2017—

踊 共二編著



ミネルヴア書房

第Ⅰ部 語りなおす宗教改革

第1章 マルテン・ルターの宗教改革

——実像と虚像
加藤喜之 15

- 1 矛盾するルターの記憶 15
- 2 一六世紀のメディア革命とスター誕生 17
- 3 福音を伝える権威——カールシュタットとの抗争 24
- 4 農民の侮蔑と落日の英雄 31
- 5 変化するキリスト教世界のなかで 35

第2章 カトリック世界としての一六世紀ドイツ

猪刈由紀 41

——信仰と行い

- 1 罪の赦しを求めて 41
- 2 信仰的行為としての巡礼と善行 47
- 3 繼続と刷新 53
- 4 行いによらず——信仰の「かたち」か「心」なき外面か 58

第3章 三つのプロテスタンント

——ルター派・西南ドイツ派・スイス改革派 岩倉依子 63

- 1 プロテスタンント三宗派の成立と三つの聖餐論 63
- 2 プロテスタンントの統合と分裂 69
- 3 プロテスタンント三宗派の教会・國家観 73
- 4 宗教改革の多様性 78

第4章 宗教改革の磁場

——都市と農村 渡邊伸 86

- 1 都市と農村の宗教改革に関する言説 86
- 2 都市から農村への改革伝播と組織化 89
- 3 農村の改革に対する都市の教会政策 98
- 4 帝国との関係 101

第5章 宗教改革はイタリアに伝わったか

——ルターとアルプス以南の世界 高津美和 109

- 1 イタリアの「改革」と「異端者」 109
- 2 イタリアにおけるルターの受容 111
- 3 イタリアの「福音主義」と「バルデス主義」 111

第6章 カルヴァン以前のフランス宗教改革 1 ドイツとフランスの宗教改革 深沢克己 2 福音主義と「モーの説教師団」 3 改革運動の挫折と説教師団の離散 4 急進派の台頭から改革派教会の創立へ 5 歴史記述法の再考 第II部 変化するキリスト教世界	4 宗教改革思想とイタリア都市 5 「亡命とニコデミズム」 第7章 一六一七年のドイツ —宗教改革から一〇〇年— 高津秀之 1 「マルティン・ルターの物語」としての宗教改革史 167 2 宗教改革一〇〇周年記念祭と記念ビラの出版 169 3 フリードリヒ賢公の夢 172 4 ザクセン選帝侯とファルツ選帝侯 184
第8章 対抗宗教改革 —イエズス会劇が映すもの— 大場はるか 1 近世ヨーロッパの演劇——研究動向 189 2 近世ドイツ語圏の説教と日本人描写 189 3 有馬晴信に関するイエズス会劇と対プロテスタント批判 194 4 展望——分野横断的なアプローチの模索 197	小林繁子 第9章 魔女迫害と「神罰」 —プロテスタンントとカトリック— 1 魔女裁判と神罰 203 2 学識者の神罰観 203 3 法令の論理——神罰と魔女訴追 203 4 ボーデンハイムの魔女裁判 207 5 神罰の意義と支配形成 210
第10章 神聖ローマ帝国の多宗派化と三十年戦争 —「神の帝国」と共存の政治学— 皆川 卓 1 和平の契機——宗派対立をどう乗り越えたか 234 2 重くのしかかる宗派——神学者と官僚たち 234	

あとがき	329	あとがき	329
人名・事項索引		人名・事項索引	
附 論 日本のドイツ宗教改革史研究 森田安一			
1 正統派宗教改革者としてのルター	320	1 正統派宗教改革者としてのルター	320
2 宗教改革急進派	319	2 宗教改革急進派	319
3 都市の宗教改革	319	3 都市の宗教改革	319
4 農村の宗教改革——農民戦争	317	4 農村の宗教改革——農民戦争	317
5 諸侯の宗教改革	314	5 諸侯の宗教改革	314
6 展望	304	6 展望	304
第11章 フッガーハー家の人々 梅香央里			
1 「フッガーハー家の町」アウクスブルク	262	1 「フッガーハー家の町」アウクスブルク	262
2 フッガーハー家とイエズス会——宗派混合からカトリックへ	266	2 フッガーハー家とイエズス会——宗派混合からカトリックへ	266
3 オルテンブルク伯領における宗教改革導入をめぐつて	275	3 オルテンブルク伯領における宗教改革導入をめぐつて	275
4 フッガーハー家内の宗派的境界を越えて	282	4 フッガーハー家内の宗派的境界を越えて	282
第12章 宗教改革急進派 踏共一			
——記憶の回復と二世紀の和解			
1 宗教改革史のステレオタイプ	287	1 宗教改革史のステレオタイプ	287
2 再洗礼派——忘れられた教会	289	2 再洗礼派——忘れられた教会	289
3 和解への長い旅	291	3 和解への長い旅	291
4 アーミッシュの手紙と対話の深化	298	4 アーミッシュの手紙と対話の深化	298
5 宗教改革五〇〇年を待たずに	301	5 宗教改革五〇〇年を待たずに	301

第1章 マルティン・ルターの宗教改革

—実像と虚像—

加藤 喜之

1 矛盾するルターの記憶

作家トーマス・マンは『ファウスト博士』（一九四七年）のなかで、語り手である古典学者ゼレス・ツァイドブロームにマルティン・ルター（一四八三～一五四六年）の宗教改革について、次のように述べさせた。

もう半分棺桶に足をつっこんでいるものの命を、このように何度も何度も救つてやることは、文化的な観点から見て、果たして歓迎すべきことなのだろうか。宗教改革者たちはむしろ反動的なタイプ、不幸の使者と見なされるべきではなかろうか……もしマルティン・ルターが教会を更新しなかつたら、人類の限りなき流域と恐ろしい殺し合いとが起こらざるすんだらうことはたしかに疑いのないところである。⁽¹⁾

この見解はおそらくマン自身のものとそれほど違わないだろう。マンはナチス政権下に亡命を余儀なくされ、ナチスの蛮行はルターの宗教改革の流れにあると考えていた。マンはまたナチスとルターの媒介者として、ドイツ帝

国を築き上げたビスマルクも糾弾する。彼によれば、ビスマルクはルターの記憶をプロイセン的な権威主義を浸透させるために利用したのである。ビスマルクの文化政策にとって、ルターは権力への服従、ナショナリズム、そして国家への忠誠を教える重要なシンボルであった。

しかし一方で異なる記憶もある。一九世紀に活躍したユニタリアンの聖職者チャーチルズ・ビアードによれば、ルターはまさに中世の暗黒や圧政から人間を解放し、近代的な自由を生みだした力そのものであった。また、一六世紀バーゼルの人文主義者セバスティアン・カステリヨは、異端に不寛容なジユネーヴの指導者カルヴァンを批判した書物の中で、ルターを賞賛した。このザクセンの改革者こそが信仰の自由の擁護者なのだ、と。

このような專制と自由、統制と寛容という相反するルターの記憶を、私たちはどのように理解するべきなのだろうか。どちらかが実像で、どちらかが虚像なのか。あるいは、どちらも実像、または虚像なのだろうか。もちろん、ルターのような偉大な歴史上の人物にこのような二面性、あるいは多面性を見いだすのは難しくない。偉人の功績や欠点は、後世においてしばしば異なった党派に利用され、またさまざま思い入れのある著述家たちによって記されるものだからである。しかるルターには、他の偉人と決定的に違う点があった。彼は、自らの記憶を広範囲にわたりてコントロールできたのだ。印刷メディアによってござる。自伝や書物を記す偉人もいるだろうが、彼の書物の影響力は一六世紀前半において圧倒的であった。⁽⁵⁾出版物の数だけでいえば、他の著者の一〇倍もの部数を打ち出していたのである。だがそうであるならおさら、なぜルターの記憶は矛盾するのだろうか。その答えもまた彼のメディア戦略に関係している。たしかに印刷メディアは、ルターに圧倒的な影響力を与えた。しかし同時に、印刷された彼の考えは、彼の手を離れなければならなかつた。その結果、改革運動はルターの思惑とは違つた方向へ進み出してしまう。そこに分派を統制し、民衆を教化する必要が生まれたのだ。

これをふまえて本章では、ルターと印刷メディアとの関係に光をあてる上で、どのように二つの相反するル

ター像が形成されたかを分析する。第二節では、壯年期を迎えたザクセンの片田舎の神学教授が、印刷メディアによつて一躍、世を席巻する英雄に成り上がつていく経緯を確認していく。第三節では、このメディア戦略が成功しそぎたことで生じた問題に注目し、方針の転換をみていく。とくに一五二一～二二年にヴィツテンベルクで起きた騒動に光をあてる。最後に第四節では、一五二五年の農民戦争に対するルターの反応に注目しながら、民衆の心が彼から離れていく様子をみていきたい。

2 一六世紀のメディア革命とスター誕生

(1) 地方都市の大学教授

ルターの名がヴィツテンベルク以外の都市で知られはじめた時、彼は三四歳であつた。アウグスティヌス会士としてヴィツテンベルク大学で働きはじめて五年が経つており、人文主義とアウグスティヌスら教父の著作に影響を受けた彼の聖書講義は、学生や同僚の間ですでに絶大な支持を得ていた。とはいえ、ヴィツテンベルク大学は一五〇二年に開学した新設大学であり、ヴィツテンベルクの街も決して大きかつたわけではない。そのためルターの影響力は、広い視点でみれば、一五一七年まで皆無だつたといつてよいだろう。

この状況を大きく変えたのが、九五の論題からなる『讀者の効力を明らかにするための討論』であつた。⁽⁶⁾いわゆる【九五箇条の論題】である。一五一七年一〇月三一日に、ルターがこの論題をヴィツテンベルクの諸聖人教会（城教会）の扉に貼り付けたことが、宗教改革の始まりだと伝えられてきた。これによつて彼はいつたい何を成し遂げようとしたのだろうか。いや、それ以前にこれは歴史的な事実なのだろうか。というのも、この事件の伝承はルターの同僚マランビトンが弔辞で語った言葉に依拠するのだが、マランビトンはこの事件の目撃者ではなかつたか

らである。⁽⁷⁾ 二〇世紀には、この事件の真偽をめぐり論争が起つた。⁽⁸⁾ 一部の学者は、この行為を捏造と見なしたほどである。しかし近年になり、伝承の信憑性を立証する証拠がいくつかでてきた。

『九五箇条の論題』の原本は現存しない。今残っているものは、すべて他の都市で出版されたものだ。原本がないことでも伝承を否定する要因となってきた。原本がないことは、大学の討論のための印刷を行っていないといふことになり、そうであれば壁に貼り出す必要もないからである。だが最近になって、ルターが『九五箇条の論題』の八週間前に行つた、九七の論題からなる『スコラ神学反駁の討論』の原本が発見された。⁽⁹⁾ この討論はヴィツテンベルクで刊行されており、大学の出版物を一手に担つていた業者ヨハネス・ラウ・ゲルネンベルクが印刷したものである。ここで重要なのはその書式である。このスコラ神学についての九七の論題は、大判の紙に二五ずつにまとめられており、これとまったく同様の書式がニュルンベルクで刊行された『九五箇条の論題』にみられるのである。⁽¹⁰⁾ どういうことだろうか。ニュルンベルクの業者は、ラウ・ゲルネンベルクが刊行した（だが現存しない）『九五箇条の論題』の書式をそのまま使用した可能性が高い。これはラウ・ゲルネンベルクが大学の討論用に『九五箇条の論題』を実際に印刷した重要な証拠である。もしそうであるなら、当時の慣習に従つて、ルター自身が城教会の壁に論題を掲示したと考えるのは不自然ではない。これに加えて、最近になり目撃証言を立証する文献が発見され、ルターが一〇月三一日に論題を貼り付けたのは以前ほど不確かではない。⁽¹¹⁾

ルターはこの行為によって何を意図したのだろうか。当時ヴィツテンベルク大学では、彼を中心に大学の改革が盛んに行われるようになっていた。従来のスコラ神学を退け、エラスムスら人文主義者とアウグスティヌスら教会教父の著作を中心に、大学のカリキュラムを刷新するというものである。それと並行してルターは、『詩篇』や『ローマ書』の講義を通して、革新的な神学の基礎を築いていた。このような自らの考えをより広い場所で公にするため、一五一七年九月に『スコラ神学反駁の討論』を用意したのだと思われる。だが、ルターの思惑は外れ、これを集めることができた。またさらに、論題がより広く知られるようだ、マインツ大司教アルブレヒトや自らの知人に送りつけたのだった。

の討論にはほとんど反響がなかった。

ルターの次なるステップこそが、九五の論題からなる『贖者の効力を明らかにするための討論』であった。だが前回の『スコラ神学反駁の討論』と違い、今回はタイミングを考慮した。彼は贖宥状を批判するにあたつて、ザクセン選帝侯フリードリヒの聖遺物が市民に披露される諸聖人の日の前夜を狙つたのである。諸聖人教会はヴィツテンベルク城に隣接しており、ヴィツテンベルク市民の注目も、論題を扉に打ち付けるルターの姿に集まつたはずである。格好のステージを得たというわけだ。こうして、前回に比べて、『九五箇条の論題』ははるかに多くの注目を集めることができた。またさらに、論題がより広く知られるようだ、マインツ大司教アルブレヒトや自らの知人に送りつけたのだった。

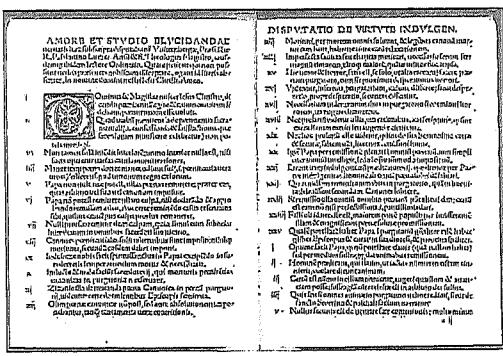


図1-1 バーゼルで四つ折り判として出版された『九五箇条の論題』

それからしばらくして、『九五箇条の論題』は、ニュルンベルク、ライプツィヒ、バーゼルなどの大都市で出版される。当時の出版の中心地であつたバーゼルでは、組版も大判ではなく、四つ折り判で読みやすいパンフレットとして刷られた（図1-1）。またさらに、ニュルンベルクでは論題がドイツ語に訳されたのだ。大学の討論が俗語に翻訳されることは、前代未聞のことであった。これにより、ルターの革新的な考えはヴィツテンベルクの壁を超えて広まっていく。だが彼自身は、この時点ではまだ印刷メディアの効力を完全には確信していなかつた。このことは、ルターが一五二八年三月五日にニュルンベルクの人文主義者クリストフ・シュエルへ宛てた書簡で、「この方法は、民衆を教えるのに適切ではない」と記したことからもわかるだろう。⁽¹²⁾

(2) ベストセラー作家へ

たしかに『九五箇条の論題』は、ルターの名をザクセンの片田舎から引っ張りだすことに成功したが、それでも認知度はまだそれほど高くはなかった。論題が印刷されたとはいっても、総数としては一〇〇〇部を下回っていたし、広まつたスピードもそれほど早くはなかったからである。⁽¹³⁾ この状況が決定的に変わるのは、論題をより読みやすい形式に書きなおした『贖宥と恩寵についての説教』の出版をもつてである。⁽¹⁴⁾

この説教は一五一年三月に出版され、ドイツ語で記されていた。全体としては、一五〇〇字程度で、八頁からなるパンフレットである。簡潔にまとまっているためわかりやすく、大衆へ向けたメッセージだといえよう。この説教において、ルター神学の中心的な教義と見なされる「信仰義認論」は記されていない。むしろ中世スコラ神学の贖罪論が明確に否定されている。彼によれば、贖宥状の購入よりも、困窮しているものを助けるほうがはるかによい。そのような行為は自己犠牲を伴うが、それこそがまさに善い行いなのだ。このメッセージは、教会の圧政からの解放を求める人々の心をつかみ、ラウ・グルネンベルクによる再版は瞬く間に三版を数えた。⁽¹⁵⁾ 一五一年の年末までには、ライプツィヒで四度、ニュルンベルク、アウクスブルク、バーゼルでそれぞれ二度再版となる。一五一年と一五二〇年にはさらに八版を数えた。ルターにとり、はじめてのベストセラーである。

作家ルターにとって『贖宥と恩寵についての説教』は、最後のベストセラーではなかった。一五一年から九年のわずか二年間でルターは、ヨーロッパでもっとも出版数の多い著者となつたのである。彼はこの二年で四五の書物を出版し、そのうち二五をラテン語で、一〇をドイツ語で記した。そしてこの四五の著作は、二九一もの版を重ねるのだ。

これはヴィッテンベルクという文化的に辺境の地にも大きな変化をもたらすことになった。一五〇二年から一五六年にかけて、この小都市で出版された書籍は、一一三冊程度である。およそ一年に八冊のペースである。しか

しルターと彼の同僚たちがこれを大きく変えた。一五一年から一五四六年では、二七二一冊の書物が出版された。およそ一年に九一冊のペースである。総計にすれば、最初の一〇年ほどで福音主義的な著述家のパンフレットは、六〇〇万から七〇〇万部を数えた。⁽¹⁷⁾ こうして一六世紀の終わりまでにヴィッテンベルクは、神聖ローマ帝国内最大の印刷都市へと成り上がる。

このような印刷メディアの急成長を支えたのが、ルターが好んだパンフレットという書物の形式であった。パンフレットは、四つ折り判が多くても三つ、合計三二頁からなる小冊子である。バーゼルで出版された『九五箇条の論題』や『贖宥と恩寵についての説教』はこの形式で印刷されており、かさばらず、値段も抑えられるのが利点であった。値段は、遍歴する職人の日当のおよそ三分の一定程度だといわれている。このような消費者側の利点もさることながら、業者にとつてもパンフレットは優れた商品であった。というのも、数百頁の本を刊行するために必要なであった資本や労働力や紙などの材料の供給、そして在庫管理は、出版業者にとって大きな負担であったからである。この負担は、しばしば出版業者を経営の危機に追い込んだことだろう。だがパンフレットであれば、工程も短く、在庫の処理も難しくはない。だからパンフレットは好まれ、爆発的な売り上げを記録することができたのである。

またさらに、ルターのメッセージは直接パンフレットを読んでいないひとの間にも広まつた。当時の識字率は、都市ではとりわけ男性の間で比較的高く、三〇%ほどであったが、農村では低かったので、帝国全体でみれば一〇%程度と考えられている。そのため、実際にパンフレットを読んだ人は多いとはいえない。しかしルターの書物を読み、影響を受けたそれぞれの土地の聖職者、あるいは巡回する説教者たちは、そのメッセージの内容を文字の読みめない民衆に説教などを通して語つていった。また都市では、市民たちがお互いにパンフレットの内容を語りあう。こうして、都市であれ農村であれ、このようなオピニオン・リーダー、あるいは中間知識人とでも呼べる名士や市

民、そして聖職者たちがルターの考え方を広めていくのだ。そうすることで、文字を読めない人たちでも、間接的ではあるが、ルターの著作に触れることができ、その革命的な考えは人々を熱狂させることになった。⁽¹⁹⁾

このような状況にローマ教会を中心とするカトリック教会も黙つてはいられない。一五一八年一〇月一二日に、枢機卿カエタヌスはルターをアウクスブルクに呼び出し、教会批判をやめるよう促す。一五一九年一月の第一週には、教皇大使カール・フォン・ミリティツ、そして一五一九年六月と七月にライプツィヒ討論でヨハン・エックが教会の立場から徹底的に批判した。いずれの会合でも教皇側は、教会への攻撃や「異端」的な教えの撤回、教会への従順を求めるが、ルターは受け入れない。既存の教会との関係はついに修復不可能な点に達してしまった。だがルターは、このような教皇派とのやりとりをパンフレットに劇的に記し、大衆の賛同を得ることに成功するのだ。この時までにルターは、印刷メディアの効力を十二分に理解し、それを使いこなすほどになつていた。一五二七年に論題が出版された頃のルターは、まだ片田舎の大学教授であり、お世辞にも出版についての造詣が深かつたとはいえない。だが、彼の元へ送られてくる、各地で印刷された彼自身の書物や、フリードリヒの所有する数多くの書物を通して、印刷について学ぶことができた。⁽²⁰⁾すると次第にルターは、地元の出版業者ラウ・グルネンベルクの仕事の質に不満を覚えるようになる。そこで、印刷業においてははるかに秀でていたライプツィヒのメルヒオーレ・ロッターがヴィツテンベルクで支店を出せるよう画策し、これに成功する。さらに北ヨーロッパを代表する画家ルーカス・クラナハの木版画がその表紙を飾るようになる。こうして、ヴィツテンベルク特有の出版様式が形成されていくのだ。

ヴィツテンベルクの出版が大成功を収めたのが、一五二〇年の三部作である。これらはルターの著作の代表作であるばかりか、商業的にも大成功だったといえよう。ロッターは『ドイツ貴族に与える書』を四〇〇〇部印刷し、五日間で売り切った。これはのちに一五版を重ねる。『キリスト者の自由』は、なんと一年で一八版を数え、ローレンツ・ヘルバイン「ドイツのヘラクレス」(1519年頃)

マ教会の秘跡のシステムを徹底的に批判した『教会のバビロン捕囚』もまた熱狂的な読者を得た。⁽²²⁾

(3) 英雄と熱狂の人々

「」のようにして広まつたルターの教えは、どのようなものだったのだろうか。それは現代の私たちが知り得る、たとえば信仰主義認識に代表されるような彼の神学とはおそらく異なつていただろう。というのも、人々が彼のメッセージに触れたのは、神学的に厳密な議論を行う大学の討論のなかではなく、都市や農村、またそれぞれの生活のなかだったからだ。オピニオン・リーダーたちもまた、それぞれの仕方でルターを理解し、その考え方を提示した。⁽²³⁾彼らにとつてルターは、なによりも善い行いを奨励する教師であり、墮落しきつた教会や聖職者たちへ裁きの言葉を放つ預言者であつた。ある修道士は、ルターを默示録にあらわされた神の御使いであり、反キリストである教皇に対しても戦いをしかける英雄(図1-2)と理解した。⁽²⁴⁾



図1-2 ホルバイン「ドイツのヘラクレス」(1519年頃)

一五二一年四月一六日、ルターが皇帝カール五世に拝謁するためヴォルムスへ到着したとき、人々の熱狂は最高潮に達した。教皇大使として当地へ赴いていたジローラモ・アレアンドロは、「全ドイツは騒乱のなかにある。九割の人々は、「ルター」と叫び、のこりの一割は「ローマ主義者に死を！」と叫んでいる」とローマへ報告したほどである。⁽²⁵⁾まさにルターは、ローマ教会のくびきからドイツを解放する英雄、新しい預言者として、この帝国都市の

人々に迎えられたのであった。そして彼もまたこの人々の声に神の靈の働きを感じていたことだろう。

このような熱狂を生み出したルターのメッセージは、印刷メディアを通して多くの人々に広まつた。しかし同時に、印刷メディアはそのメッセージを曖昧なものにしたといえよう。人々が福音に見出した自由や解放への希望は、彼が考えていたものとは微妙にされていた。さらにいえば、人々のうちにひとたびこのような自由や解放への熱狂が生み出された時、ルターはその熱狂を導くことができるのだろうか。ましてや、ヴィッテンベルクの同僚たちはこの重い責任に耐えられるのだろうか。というのも、ヴォルムスを後にしたルターは、ザクセン選帝侯の命により一年ものあいだヴィッテンベルクから行方をくらますことになるからである。

3 福音を伝える権威——カールシュタットとの抗争

(1) 高まる改革への熱意

ルター不在となつたヴィッテンベルクでは、人文主義者フリップ・マランビトン、アウグステイヌ修道会士ガブリエル・ツヴィーリング、そして司教座付補助司祭アンドレアス・カールシュタットが改革を推し進めていた。一五二一年六月頃から彼らはいくつかの討論を行い、教会が禁じていた聖職者の結婚やパンと葡萄酒からなる二種陪餐を擁護する。九月になり、ついに改革が実行に移される。マランビトンは学生たちと共に初の二種陪餐を実践し、聖職者だけで行ういつさいの私唱ミサを禁止するの⁽²⁵⁾。これに合わせてアウグステイヌ修道院でも、一〇月六日にツヴィーリングが私唱ミサを禁じ、修道士たちは伝統的なミサをあげるのを拒否するようになる。これらを耳にしたフリードリヒ選帝侯は、一〇月一〇日に大学へ書状をしたため、あらゆる宗教儀礼の変更を禁じた。また、大学教授と諸聖人教会の聖職者たちからなる委員会を発足させ、事態の検証にあたらせた。⁽²⁶⁾だが数日後ツヴィーリングは、ふたたび激しく私唱ミサを糾弾し、それによって今度は修道院からミサが一掃される。

この時点では、マランビトンとツヴィーリングが改革を先導し、カールシュタットはむしろ一人をなだめる役回りだった。たとえばカールシュタットは、一〇月一七日に一三八の論題からなる討論を行い、改革は市参事会の同意のもとでなされるべきだと主張したほどである。⁽²⁷⁾

数日後、委員会は驚くべき内容の報告を行う。選帝侯の意に反し、死者へのミサを廃止し、二種陪餐を導入すべきだというのだ。同時に、良心のとがめを感じるものたちに対しては、私唱ミサを残しておくべきだとも主張している⁽²⁸⁾。この報告に選帝侯は同意できるはずがない。選帝侯の考えによれば、実質的な改革はあくまで教会会議(公会議)の決定を待つ必要があつたからである。そしてあらゆる反対意見がなくなるまで、つまり、完全に教皇派がヴィッテンベルクからなくなるまで忍耐強く待つべきだというのだ。選帝侯の帝国内での政治的な立ち位置を考えれば当然の見解であろう。

しかし、ひとたび熱狂した民衆を抑えるのは容易なことではなかつた。一一月には、フランシスコ会の教会でのミサが暴徒によって妨害されるという事態が起きてしまつ。フリードリヒは犯人を捕まえ罰するように命じるが、功を奏しない。勢いにのつたヴィッテンベルク市民は、市参事会に対して改革についての大箇条を要求する。これらは、説教の自由、強制的なミサの禁止、私唱ミサの禁止、希望者には二種陪餐の許可、居酒屋・宿場・売春宿の閉鎖、礼拝の妨害を罰しないといふものであった。⁽²⁹⁾

これに乘じるようにカールシュタットは、一月一日に福音主義的なミサを行ふと宣言した。だが実際には、予定を繰り上げクリスマスにこれを行い、諸聖人教会の参事会の怒りを買つ。また、カールシュタットは祭司服ではなく、大学教授の服装で聖餐式を執り行う。その数日後に、ツヴィッカウの地で同じような改革運動を展開していたトーマス・ミュンツァーの影響を受けた織工ニクラウス・シュトルヒがヴィッテンベルクを訪れ、神から直接的な

啓示を受けたと証言し、幼児洗礼を否定した。カールシュタットはこのシヨトルビを家に迎え入れるのであつた。一五二一年一月になり、毎日行われていたミサは『詩篇』についての説教に変更され、金曜日には説教が二度行われるようになる。ツヴィーリングもカールシュタットにならい、一月一日に諸聖人教会で二種陪餐を執り行う。ルターは、この決定を大学と市参事会の合意のもとなされたものであると選帝侯に報告した。カールシュタットはこれに飽き足らず、改革をさらに促進させるため「聖画像の撤去」というパンフレットを一月二十七日に出版した。ルターにはメランヒトンもついに反対を表明し、選帝侯の参事アインジーデルに聖画像については血由 (adiaphora) であるべきだとこう内容の手紙を書き送った。⁽³²⁾ しかし市民はカールシュタットに賛同しており、二月の初めに暴徒化した市民は市教会の聖画像を破壊する。これにはバイヤーも驚き、アインジーデルとともにカールシュタットとツヴィーリングの説教を問題視するようになつた。そこでアインジーデルは、カールシュタットへ書簡をしたため、扇動的な説教をひかえるよう命じ、メランヒトンをツヴィーリングの説得にあたらせた。これによつてツヴィーリングはツヴィーリングを去るが、カールシュタットは止まらない。こうして、二月八日にアインジーデルとバイヤーは、説教者たちが民衆を扇動していると選帝侯へ報告するのだ。⁽³³⁾ 事態の收拾が絶望的になつたと知つたルターは、ついに身を隠していたヴァルトブルク城を離れ、ツヴィーリングへ戻る決心をするのである。

(2) ツヴィーリングへの帰還と秩序の確立

ツヴィーリングへ戻ったルターは、三月九日から八日間にわたりて四旬節の説教を行う。彼は説教を通して、自らの権威を確立し、改革の方向性を打ち出した。それが熱狂する民衆をなだめ、秩序を再び確立するのに最も効果があると考えたからだろう。説教のなかで彼はまず、「自分こそが神によって最初に真理を啓示され、人々を導くために召されたと宣言する。カールシュタットやメランヒトンは彼から学んだのであり、すべては彼から始まったのだ。その一方で、今回の騒動の責任は自分にはない」という。ルターによれば、ヴァルトブルクにいた彼のもとにツヴィーリングでの騒動について何の情報も届いていなかつたからである。したがつてツヴィーリングの人々は、ルターを信頼し、ルターの権威に改革を委ねるべきだと彼は主張した。

残りの説教でルターは、より具体的に改革のあるべき姿を描きだしていく。カールシュタットやツヴィーリング、そして市参事会は、法によって改革を推し進めようとした。神の言葉が命じていることを実行に移すのは当然だと考えたからである。カールシュタットらは、私唱ミサの禁止、聖職者の結婚、聖画像の禁止、肉食、二種陪餐といった改革をすぐさま導入しようと画策した。とくに聖画像に関して言えば、神への偶像礼拝になるので破壊を試みた。しかしルターは、このやり方ではまだ改革の教えに同意できない人々を傷つけることになるといふ。必要なのは法ではなく、むしろ説教や教えを語ることで人々の心が神によって変えられるのを待つべきなのだ。それが彼やメランヒトンがこれまで行つてきたことだからである。ルターによれば、「フイリップとアムスドルフとツヴィーリングベルクでビールを飲んでいる間に、みことばが人々のあいだで働いた」。⁽³⁴⁾ それゆえ、しばらくは実質的な改革から手をひき、説教や講義に専念しなければならないと説教を結ぶ。

この一連の説教はルターの権威を確立させ、ツヴィーリングベルクに秩序を回復した。そうするにあたつて彼は、自分を騒動の指導者たちから鋭く区別し、自らの権威の正統性を聴衆に訴えかけた。しかし彼の描き出した光景は、

事実と微妙にずれている。まず彼は、この騒動の責任を否定するにあたって、騒動に關する無知を主張したが、これは正しくない。情報は常に書簡を通して彼に届いており、さらに一二月にはヴィツテンベルクを訪れ、改革の進展に満足していたからである。また、ヴィツテンベルク規定に定められた条項は、ルターがこれまで様々なパンフレットで訴えてきた内容と大きく違わなかつた。⁽³⁸⁾ たしかに彼は、信仰の弱いものへの配慮を軽視したことはなかつたが、この微妙な違いを多くの人は理解できないだろう。むしろ民衆たちからすれば、彼の同僚たちは彼の教えに素直に従つたにすぎない。そのため、「騒動への関与を一切否定」、自らの權威の正統性を訴えるルターには違和感を覚えざるをえない。

もちろんルターが苦境に立たされていたのは否定できない事実である。状況をコントロールできなければ、改革は民衆の騒動や反乱を引き起すものとして教皇派の諸侯や領主につぶされてしまう。これまでの努力が水の泡である。また、実質的な改革の導入は、これまで彼を保護してきたフリードリヒ選帝侯の政治的な立場を危険にさらすことになつていただろう。実際、帝国議会は一五二二年一月一〇日にあらゆる宗教儀礼の変革を禁止していた。しかしこれらを勘案しても、ルターのやり方には疑問が残らないだろうか。結果的には、カールシュタット一人が責任を負わされ、ヴィツテンベルクを追われることになる。

(3) カールシュタットの没落

ルターの帰還によって、ヴィツテンベルク規定が導入した改革はひとまず保留となつた。同時に当局は、カールシュタットを騒動の主犯と見なし、大学での教育を継続することは許可したもの、教会で説教することを禁止した。カールシュタットは自分の処遇もさることながら、改革が保留されたことに異を唱えるために、カトリックのミサを批判したパンフレットを一五二一年四月に出版する。これがルターへの批判ととられ、検閲により発売禁止

⁽³⁹⁾
となる。

カールシュタットとルターの溝は深まるばかりであった。カールシュタットは大学教授のしるしてあつたガウンを脱ぎ、自分を「新しい俗人」と名乗るようになつていた。一五二三年の夏にはついに大学の職を辞し、イエナ近郊の町オルラミュンデへ移つた。主任司祭として仕えるためである。また、イエナに出版業者をつけ、いくつかのパンフレットを出版している。それによると、カールシュタットの考えはますます急進的なものとなつておらず、とりわけ聖餐式の理解に關しては、スイスのツヴァイニングに近いものとなつていた。⁽⁴⁰⁾ これに対してもルターは、カールシュタットの出版物を禁止することに成功する。通常の検閲は、まだ大学の神学部の承認をとることが必要であつたが、彼は直接選帝侯に働きかけ、これを成し遂げたのである。だがこの処置はカールシュタットの批判を止めることができず、ルターが一五二三年一二月にヴィツテンベルクで導入した礼拝改革の批判を招いてしまう。ルターは典礼にドイツ語を使用したが、部分的にラテン語や伝統的なカトリックの要素をのこした。カールシュタットはこれを「教皇派のミサ」と見なし、パンフレットで攻撃した。さらにカールシュタットは、自らのサクラメントについての理解を記したパンフレットを出版した。⁽⁴¹⁾ これによれば、聖餐はキリストの死を記念するためがあり、キリストの身体的な臨在を伴わない。

一五二四年の春にカールシュタットは、急進的な礼拝の改革をオルラミュンデで導入する。「の改革によると、会衆は詩篇を歌い、聖画像を破壊し、幼児に洗礼を施すのを拒否しなければならない。」の」とは、おぐさま」との地方を治めるヨハン・フリードリヒ公やルターの知るところとなつた。また、同時に、テューリンゲンの村アルシュテットの牧師となつていたミュンツァーが、民衆を扇動しているとの報告も届いていた。そこでルターは、ヨハン・フリードリヒ公の命を受け、一五二四年の夏にこの地方の巡察に向かう。その時カールシュタットと会合をもつただが、会合は誹謗中傷の飛び交う泥仕合となつてしまふ。その結果、初期宗教改革運動の二大牽引者の決

裂は決定的となつた。⁽⁴⁴⁾

その後カール・シュタットはザクセンを追放され、各地を転々とした。この間、カール・シュタットはチューリヒやバーゼル、そしてシュトラースブルクの改革者や再洗礼主義者たちとも交流し、影響を与えていた。⁽⁴⁵⁾ 一五二五年の農民戦争では一時的にルターのもとに身を寄せるが、再度ヴィツテンベルクを去ることになった。最終的にカール・シュタットは、バーゼル大学の旧約聖書の教授となり、スイスでの改革に尽力することになる。

このカール・シュタットとの確執は、印刷メディアを通して生まれたルター像を理解するにあたって重要な要素である。印刷メディアによつて彼は一躍スターとなつた。だが、そこにあつたのはルターという虚像であり、彼の神学の厳密な理解ではない。むしろ民衆は圧政や搾取からの解放をみたのだ。その虚像には聖俗を明確に分ける二王国論や信仰の弱い者への配慮、騒動や謀反の禁止といった一五二二年の騒動以前のルターの著作にもみられるような考えはみいだせない。カール・シュタットが理解していたルターもおそらくこの虚像に近かつたはずである。それがカール・シュタットの理想だった。だから彼は民衆に寄り添い、改革を実現しようとしたのだろう。他方でルターは、メディアが作り出したこの虚像を破壊し、「正しい」改革を打ち立てていかねばならない。そのためには、これまでのように「ビールを飲んでいる間に、みことばが人々のあいだで働く」への待つだけではなく、積極的に自らの権威を打ち立て、検閲や巡察を行う必要があった。これが改革運動の重要な分岐点となる。だが分岐点はこれひとつではない。一五二五年の農民戦争へのルターの応答は、多くの改革者や民衆のうちにあつた虚像を決定的に破壊する」とになるのだ。

4 農民の侮蔑と落日の英雄

(一) 農民の『一二箇条』と福音

農民戦争もまた、印刷メディアによる事件である。一五二五年三月にシュヴァーベンの農民たちによる『一二箇条』がアウクスブルクで印刷されると、それは瞬く間に各地へ広がつていった。南はシュトラースブルクやヴォルムス、レーゲンスブルク、そしてコンスタンツで版を重ねており、北部でも、ツヴィッカウ、ライプツィヒ、マクデブルクに広がつた。ミュンツァーの記したものと合わせると、短期間で八五もの版を数えるのだ。これによつて、農民たちの蜂起は統一した理念をもつた運動となり、勢力を増した農民たちは諸侯や領主たちに恐怖を与えることになる。

ルターは、この『一二箇条』への最初の応答として、『農民の一箇条に対する平和勧告』というパンフレットをその年の四月下旬に記した。⁽⁴⁶⁾ 農民たちは福音運動との連帶を求めており、『一二箇条』の聖書的な真偽の判断を代表的な改革者たちに委ねたからである。⁽⁴⁷⁾ ルターはこれを好意的に受け取つており、その言葉にも農民たちへの配慮が見受けられる。

【勧告】には、諸侯と農民双方への忠告が記されていた。まず諸侯に向かつてルターは、その搾取と專制を非難する。とりわけアルベルティン系のザクセン公ゴルクに代表されるような、これまで福音の運動を弾圧してきた諸侯が批判されている。教皇派に留まり続けることがこのようないきな事態を招くことになつたというのだ。またルターは今回の蜂起の原因ではなく、ミュンツァーのようなサタンに操られた「偽預言者」たちが農民たちを扇動していると云う。⁽⁴⁸⁾

一方でルターは、農民たちを「愛する兄弟たち」と呼び、論すようにして語りかけた。ルターによれば、農民たちをこのような行動に導いているのは、悪魔であり、殺人の靈である。そのためすべての靈や説教者を信じてはいけない。また、農民たちは「キリスト教同盟」を名乗ることによって神の名をみだりにとなえているという。といふのも、農民たちは暴力に訴えかけているからである。剣をとることは農民には許されておらず、統治者のみに許された権利なのだ。キリスト者を名乗る者は、むしろキリストのように專制や苦しみを耐え忍ばねばならない。ルター自身も教皇や皇帝によって迫害されたが、暴力に訴えることはなかった。たしかに当局の圧政や搾取は間違っているが、」のようになんか農民たちの要求も世俗的なものなので、これは福音ではなく異教だと論じる。

『勸告』の最後でルターは、双方の間違いを指摘した。暴君は罰せられ、暴動もまたよい結果を生まない。といふのも、どちらの訴えもキリストや聖書によつては正当化できないからである。諸侯が戦つてゐる農民はキリスト者ではなく、また農民が戦つてゐる相手もキリストの殺害者でありキリスト者ではないのだ。そのため、双方は和解しなければならず、いずれかの一昧として戦つうものには永遠の罰が待つてゐると論を結ぶ。

この書物は、領主と農民双方への批判があり、比較的バランスのとれたものだったといえるだろう。だが出版された頃には、すでに状況が悪化してゐた。そのため、数週間後に記されたルターの書物では、トーンがまったくとつてよじほど変化してゐる。

(2) 偽預言者の殺人・強盗団

『勸告』を書き終えた直後、ルターはアイスレーベンで説教をする機会を与えられた。そこで彼は民衆の反感を抗して『(51)農民の殺人・強盗団に抗して』(ランツフート)を書き上げるのだ。

この短いパンフレットのなかでルターは、すべての責任は「悪魔の頭目ミュンツァー」にあるとした。彼のせいで「氣の毒な人々は邪道に陥り」、「三つの恐るべき罪を犯したのだ。第一に、農民たちは諸侯や領主といった正當な権力へ誓つた服従をないがしろにした。第二に、彼らは暴動を起し、略奪をしてくる。また第三に、彼らはこれらの罪を福音の名のもとに行つてゐる。彼によれば、まさに時は終末の様相を呈しており、「地獄には一匹の悪魔も残つておらず、彼らはことごとく農民のうちにはござりこんでしまつた」。

このような無秩序を正すにはひとつの解決策しかない。それは反乱を起す農民たちを躊躇せずに皆殺しにする」とである。ルターによれば、福音を認容しない教皇派の当局であつても、和解の話し合いなしに「農民を打ち、罰する」とがでかる。ところが、農民は「不従順な反乱を惹起する殺人者、略奪者、瀆神者であることが明瞭になつた」からだ。悪者を罰するには当局の義務なのである。また、福音を認容している諸侯なら、祈り、話し合いをもつべきだと勧める。それが役に立たなければ、容赦なく罰しなければならない。



図1-3 『農民の殺人・強盗団に抗して』(ランツフート
1525年)

さらにルターは、農民たちの討伐を勧めるだけでなく、そこに神学的な正当性を付与するのだ。彼によれば、当局に味方して殺される者は、キリスト教徒としての良心をもつていれば殉教者になれる。一方で、農民に味方する者

は、永遠の業火で焼かれる⁽⁵³⁾。なぜ彼は「」のように語ることができたのか。それは彼が「」の戦争を終末の始まり、最後の日の序曲として捉えていたからである。もしかしたら農民たちが諸侯から権力を強奪するかもしれない。そうなれば、その篡奪者たちを罰するためにキリストがこの地に戻る、と。だからこそルターは、諸侯たちへの次のようないいふろしい獎励をもつて本書を結ぶのだ。

なしうるものは誰でも刺し殺し、打ち殺し、絞め殺しなさい。そのために死ぬのならあなたにとつて幸せである。これ以上祝福された死はあなたにありえない。というのも、あなたは神の御言と命令に従い、また悪魔と地獄のきずなから、あなたの隣人を救い出す愛の奉仕のうちに死ぬからである⁽⁵⁴⁾。

(3) 英雄の没落

ルターの『農民の殺人・強盗団に抗して』が刷りあがつた時、世間はフランケンハウゼンの話を持ちきりだつた。カトリックの擁護者たちはこれを好機と捉え、ルターの非情さを喧伝した。この年だけでも『農民の殺人・強盗団』は二〇もの版を数え、その版元の多くは普段はルターの書物を印刷しないケルン、インゴルシュタット、ドレスデンといったカトリック都市にあつた⁽⁵⁵⁾。もともと『農民の殺人・強盗団』は『勸告』とともに印刷されたが、それらの都市ではよりスキャンダラスな『農民の殺人・強盗団』のみが刊行された。カトリックだけでなく、ルターに共感を示してきた人たちも、この著作でのルターの言葉には惑いを感じない。なかにはフリードリヒ選帝侯がルターから離れていくのであつた。

逝去したため、保身を考えカトリック諸侯に取り入るうとした⁽⁵⁶⁾、といふ者までいたほどである⁽⁵⁷⁾。しかしルターは自分の正義を信じて疑わなかった。友人への弁明によれば、農民たちは神の秩序を乱し、彼らに禁じられている暴力や強奪を行つた。そのような農民たちが正当な権力によって口を封じられ、処罰されることは何もおかしくない⁽⁵⁸⁾。こうして、多くの民衆は預言者、救世主としてのルター像が虚像であったことを理解し、権力の側にたつ専制的なルターから離れていくのであつた。

5 変化するキリスト教世界のなかで

本章は、ルターと印刷メディアの関係を通して、二つの像が形成されていくのを見た。ひとつは、ヴィツテンベルク騒動にいたるまでの、教皇や皇帝の圧政に立ち向かう英雄ルターである。もうひとつは、ヴィツテンベルク騒動の後で顕著になつた、権力の側に立ち、検閲や暴力を正当化するルターである。しかし彼自身の考へにはそれはど変化はない。騒動の前から、キリストにある自由はあくまで非政治的なものであり、だからこそこの世の苦難を耐え忍ぶことができると主張していた。また、改革は騒動や暴力を通してなされるものではなく、神の言葉を語ることによってのみ可能だともはつきり記していた。騒動の後、ルターがより積極的に教会の巡察や扇動的な司祭を取り締まる「監督」という役職を設置したのは、「正しい」神の言葉が語られるためである。そこにはれはない。むしろ二つのルター像が生まれた理由は彼の変節にあるのではなく、印刷メディアによるところが大きい。といふのも、パンフレットや書物は受け取る側の状況によって意味が決定されやすいからである。説教や講義であれば、より厳密な意味の伝達が可能であろう。だが印刷物はひとたび著者の手を離れれば、読み手の文脈のなかで独自の意味をもち出すのだ。たしかに初期のパンフレットは、彼の影響力を増し、彼に権威を与えることに成功した。同

歴史その權威は、既非神やある宗教へ、市民や農民へこゝの民族の愛護や自由や解放に向ひ方回く向かへ限らず、力あるいたのやある。今や市街はグルク騒動や農民戦争の後裔で困らかになつたのは、ルターが求める改革は民衆のものと區一ではなくハレハレだつた。そのため一五二五年以降、ルターの影響力は急速に膨れ、画期的なものと認めた。

しかしればルターが岳禪メテマアを配説ひだりしを意味しな。彼は本を書め續け、小都市ヴァイシトハグルクは一所ハペドモ傳教の出版の中心地であると続けた。とほシベ、記された書物の内容は大抵へ異なりトヨ。農民戦争以降、ルターは宗教教育に関連する書物に力を入れ、教会規則集、教理問答、贊美歌集、説教集などガバヤハヘハタルク中の岳禪機が心躍り上がつてゐる。ルターのメタヤーフは初期の爆発的な影響力を失つたので、岳禪は、やたらと組織的に教会へ頼むのなから販売してゐるやう。

注

- (一) ルーベ・ルハヽ医療機・医療出版『トトカベーリ』新装版 1100 冊、上巻 1 冊。注。
- (2) Thomas Mann, "The letter to Gustav Bume on July 5, 1919", in Erika Mann (ed.), *Letters of Thomas Mann 1889-1955*, 90; Erika Mann (ed.), *Thomas Mann: Briefe 1889-1936*, Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1961, 165, トウベ・医療トヨセヌーの岳禪ノトヨ。Christopher J. Probst, *Demonizing the Jews: Luther and the Protestant Church in Nazi Germany*, Bloomington, IN: Indiana University Press, 2012, 165。
- (3) Charles Beard, *Martin Luther and the Reformation in Germany: Until the Close of the Diet of Worms*, London: Kegan Paul, Trench & Co., 1889, 3.
- (4) Sebastian Castello, *De haereticis, an sint persequendi*, Basel: Peter Horst, 1554.
- (5) Mark U. Edwards, Jr., *Printing, Propaganda, and Martin Luther*, Berkeley: University of California Press, 1994, 27.

(一) ルーベ・ルハヽ医療機・医療出版『トトカベーリ』新装版 1100 冊、上巻 1 冊。注。

- (一) Philip Melanchthon, "Oratio in funere D. Martini Lutheri", in C. G. Bretschneider/H. B. Bindsel (ed.), *Corpus reformatorium: Philipp Melanchthons Opera quae subserviunt omniu* (CR) (Halle: Schwetschke, 1835-1860) 11:726-734, ハジヨトヨツシ、メトハルトハルターグルトハ岳禪の岳禪出版ノトヨ。CR 6: 155-170, 165。
- (2) 講義おもじゆ出世の岳禪ノトヨ。水田謙一『基督教の真摯——カトリックトロトケタハムスルキ』講論社、1100 冊、トヨ。
- (3) Falk Eisermann, "Der Einblattdruck der 95 Theses im Kontext der Mediennutzung seiner Zeit", in Irene Dingel/Henning P. Jürgens (ed.), *Meilensteine der Reformation. Schlüsseldokumente der Frühen Wirklichkeit Martin Luthers*, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2014, 100-106.

- (4) Andrew Pettegree, *Brand Luther: How an Unheralded Monk Turned His Small Town into a Center of Publishing, Made Himself the Most Famous Man in Europe and Started the Protestant Reformation*, New York: Penguin Press, 2015, 71.
- (5) Timothy J. Wengert, "Georg Major: An 'Eyewitness' to the Posting of Martin Luther's Ninety-Five Theses", in Joachim Ott/Martin Treu (ed.), *Luther's Thesenanschlag: Fiktion oder Fiktion*, (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2008), 93-97.
- (6) ルーベ・ルハヽ医療機・医療出版『トトカベーリ』新装版 1 冊、八年内日本版の翻訳】Martin Luther, *Werke: Kritische Gesamtausgabe, Briefe (WAB)*, Weimar: Böhlau, 1930, 1: 152.
- (7) Scott H. Hendrix, *Martin Luther: Visionary Reformer*, New Haven: Yale University Press, 2015, 62.
- (8) ルーベ・ルハヽ医療機・医療出版『トトカベーリ』新装版 1 冊、八年内日本版の翻訳】『ルター新作集』第 1 番集 1 冊、ハヤカワ文庫新書、110 冊、1 冊。
- (9) Pettegree, *Brand Luther*, 80.
- (10) Pettegree, *Brand Luther*, 105.
- (11) ルーベ・ルハヽ医療機・医療出版『トトカベーリ』新装版 1 冊、ハヤカワ文庫新書、110 冊、1 冊。

- (21) Miriam Usher Chrisman, "Reformation Printing in Strasbourg", in Jean-François Gilmon/Karin Maag, *The Reformation and the Book*, Aldershot: Ashgate, 1998, 214-234; Paul A. Russel, *Lay Theology in the Reformation: Popular Pamphleteers in Southwest Germany, 1521-25*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986; Edwards, *Printing*, 129.

(22) Pettigree, *Brand Luther*, 147.

(23) Edwards, *Printing*, 106-107.

(24) Robert Kolb, *Martin Luther as Prophet, Teacher, and Hero: Images of the Reformer, 1520-1620*, Grand Rapids, MI: Baker Books, 1999, 29.

(25) Kolb, *Martin Luther as Prophet, Teacher, and Hero*, 26.

(26) Nicholas Müller, *Die Wittenberger Bewegung 1521 und 1522: Die Vorgänge in und um Wittenberg während Luthers Warthausenfahrt: Briefe, Akten u. dgl. und Personen*, 2nd ed. (NM) (Leipzig: Heinsius, 1911), #4.

(27) NM #9, #10.

(28) NM #15, #18.

(29) MM #16.

(30) NM #54, #68.

(31) Hendrix, *Martin Luther: Visionary Reformer*, 124.

(32) ニコラウス・ミューラー著「1521年と1522年のウッテンベルクの出来事」WABr 2, 443-444.

(33) ベルハルト著「1521年と1522年のウッテンベルクの出来事」NM #84, #85.

(34) MM #89.

(35) Luther, *Werke: Kritische Gesamtausgabe* (WA), Weimar: Bohlau, 1905, 10/3, 8.

(36) WA 10/3, 11.

(37) WA 10/3, 18.

(38) Mark U. Edwards Jr., *Luther and the False Brethren*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1975, 10.

(39) Amy Nelson Burnett, *The Eucharistic Pamphlet of Andreas Bodenstein von Karlstadt*, Kirksville, MO: Truman State University Press, 2015, 8.

(40) 画表の翻訳は「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」である。エドワード著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(41) Burnett, *The Eucharistic Pamphlet*, 10-11.

(42) Edwards, *Luther and the False Brethren*, 41-45.

(43) Burnett, *The Eucharistic Pamphlet*, 16.

(44) 現在の文献学では「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」である。エドワード著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(45) Pettigree, *Brand Luther*, 238-239.

(46) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(47) James M. Stayer, *The German Peasants' War and Anabaptist Community of Goods* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1991), 39.

(48) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(49) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(50) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(51) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(52) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(53) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」(54) ネルターバー著「カールスタットの誤りとエヌベルハルト著「カールスタットの誤りを攻撃するための福音主義の宣教書」」

- (55) Pettagree, *Brand Luther*, 242.
 (56) Edwards, *Luther and the False Brethren*, 69.
 (57) ルター「神頤詛謗「靈底はおやむわ」」の書簡」『ルター著作集』第一集第六卷、三一八〇～三一八一頁。
 (58) ピート・イグニー『靈底はおや書簡』一七七頁。

第三章 カトリック世界としての一六世紀ドイツ

——信仰と行い——

猪刈由紀

1 罪の赦しを求めて

(一) 信仰から行いく

ふさわのむ、神のみおこはせりへんば（聖アウグスティヌスの「信へよめ」と）外的な場所を通じてではなく、近づかんとするものの意指（いみ）は、おたつしめいに近づくのだからである。そして、それは心と心情との足によいで（mit den Füßen des Herzens und Gemüths）歩（ゆ）んで行くのである（マルティン・ルター^{（一）}）。

キリスト教における信仰の本質とは、非常に簡潔にまとめれば、キリストによってめぐらされた福音と、キリストの十字架による実現された救い（=神との和解）を體（からだ）へして式化（しきか）したものだ。しかし、そうした信仰をもつて生きるところへいは、實際のところのものでは生きるにふさわしいなのだろうか。古代以来、キリストを體（からだ）ちがいの間（ま）じめに答えてきたのかを知るには、じわゆる信仰実践の長くまた広範な歴史を紐解かねばならないが、

高津美和（たかつ・みわ）第5章

1975年 生まれ
 2008年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。
 現 在 早稲田大学文学学術院非常勤講師
 主 著 『ヨーロッパ・「共生」の政治文化史』（共著）成文堂、2013年。
 「フランチェスコ・ブルラマッキの陰謀——16世紀ルッカの政治と宗教」『エクフラシス——ヨーロッパ文化研究』第5号、2015年。

深沢克己（ふかさわ・かつみ）第6章

1949年 生まれ
 1978年 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
 1984年 プロヴァンス第1大学（フランス）博士号取得（歴史と文明）
 現 在 東京大学名誉教授、京都産業大学文化学部客員教授
 主 著 *Toilerie et commerce du Levant au XVIIIe siècle. D'Alep à Marseille.* Paris: Éditions du CNRS, 1987.
 『海港と文明——近世フランスの港町』山川出版社、2002年。
 『マルセイユの都市空間——幻想と実存のあいだで』刀水書房、2017年。

高津秀之（たかつ・ひでゆき）第7章

1974年 生まれ
 2008年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（文学）
 現 在 東京経済大学経済学部准教授
 主 著 「手術台の上のルターと宗教改革者たち——ヨハネス・ナースの対抗宗教改革プロパガンダ」『エクフラシス——ヨーロッパ文化研究』第3号、2013年。
 『ヨーロッパ文化の再生と革新』（共著）知泉書館、2016年。

大場はるか（おおば・はるか）第8章

1978年 生まれ
 2010年 ルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン大学）近世・近代史学科博士課程修了。Ph.D.
 現 在 久留米大学文学部国際文化学科准教授
 主 著 “Francis Xavier and Amor Dei in Jesuit drama in the south of the German-speaking Area”, *European Medieval Drama*, 18, 2016.
 「近世内オーストリアの居城都市グラーツにおけるイエズス会劇と肥後・八代の殉教者——「日本劇」の比較考察のために」『比較都市史研究』35/1, 2016年。

小林繁子（こばやし・しげこ）第9章

1978年 生まれ
 2013年 東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）
 現 在 新潟大学教育学部准教授
 主 著 「通告としての請願——近世マインツ選帝侯領の魔女裁判事例から」『ドイツ研究』第49号、2015年。
 『近世ドイツの魔女裁判——民衆世界と支配権力』ミネルヴァ書房、2015年。

皆川 卓（みながわ・たく）第10章

1967年 生まれ
 1999年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）
 現 在 山梨大学大学院総合研究部教育学域教授
 主 著 『等族制国家から国家連合へ』創文社、2005年。
 『中近世ヨーロッパの宗教と政治——キリスト教世界の統一性と多元性』（共著）ミネルヴァ書房、2014年。

梅 香央里（とが・かおり）第11章

1980年 生まれ
 2010年 日本女子大学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期単位取得満期退学。博士（文学）
 現 在 日本女子大学学術研究員・兼任講師
 主 著 「宗教改革期アウクスブルクにおけるフッガー家——宗派的対立・寛容のはざまで」森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館、2009年。
 「16世紀南ドイツにおけるフッガー家のオヤコ関係——モントフォルト伯家との関係を中心として」『比較家族史研究』29, 2015年。

森田安一（もりた・やすかず）附論

1940年 生まれ
 1970年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（西洋史学）中途退学。博士（文学）
 現 在 日本女子大学名誉教授
 主 著 『木版画を読む——占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』山川出版社、2013年。
 『ハイジ』の生まれた世界——ヨハンナ・シュピーリと近代スイス』教文館、2017年。

《編著者紹介》

踊 共二 (おどり・ともじ)

1960年 生まれ
1991年 早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士（文学）
現在 武藏大学人文学部教授
主 著 『改宗と亡命の社会史——近世イススにおける国家・共同体・個人』創文社, 2003年。
『中世ヨーロッパの宗教と政治——キリスト教世界の統一性と多元性』(共編著) ミネルヴァ書房, 2014年。
『アルプス文化史——越境・交流・生成』(編著) 昭和堂, 2015年。
『忘れられたマイノリティ——迫害と共生のヨーロッパ史』(共著) 山川出版社, 2016年, ほか多数。

MINERVA 西洋史ライブラリー113

記憶と忘却のドイツ宗教改革

——語りなおす歴史 1517-2017——

2017年10月31日 初版第1刷発行 〈検印省略〉

定価はカバーに
表示しています

編著者 踊 共二

発行者 杉田啓三

印刷者 藤森英夫

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話代表 (075)581-5191
振替口座 01020-0-8076

©踊共二ほか, 2017

亜細亜印刷・新生製本

ISBN978-4-623-08133-2

Printed in Japan

《執筆者紹介》(執筆順, *は編著者)

*踊 共二 (おどり・ともじ) 序章, 第12章, あとがき

奥付編著者紹介欄参照。

加藤喜之 (かとう・よしゆき) 第1章

1979年 生まれ
2013年 米国プリンストン神学大学院博士課程修了。Ph.D.
現在 東京基督教大学神学部准教授
主 著 『知のミクロコスモス——中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』(共著) 中央公論新社, 2014年。
「神学的普遍性をめぐる討議——スラヴォイ・ジジェクとジョン・ミルバンクによるキリスト教の表象」『日本の神学』第53号, 2014年。

猪刈由紀 (いかり・ゆき) 第2章

1971年 生まれ
2007年 ボン大学哲学部博士課程修了。Ph.D.
現在 上智大学外国语学部非常勤講師
主 著 *Wallfahrtswesen in Köln vom Spätmittelalter bis zur Aufklärung*, SH-Verlag, Köln, 2009.
「ハレ・フランケ財團(シュティフトウンゲン)における教貧と教育——社会との距離、神との距離、積極性」『キリスト教史学』第70集, 2016年。

岩倉依子 (いわくら・よりこ) 第3章

1954年 生まれ
1989年 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学
現在 創価大学文学部教授
主 著 『宗教改革と都市』(共著) 刀水書房, 1983年。
『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』(共著) 教文館, 2009年。

渡邊 伸 (わたなべ・しん) 第4章

1959年 生まれ
1988年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）
現在 京都府立大学文学部教授
主 著 『宗教改革と社会』京都大学学術出版会, 2001年。
『コミュニケーションから読む中世ヨーロッパ史——紛争と秩序のタペストリー』(共著) ミネルヴァ書房, 2015年。